



平成25年8月13日  
内閣府（防災担当）

## 南海トラフ沿いの大規模地震の予測可能性に関する調査部会（第8回） 議事概要について

### 1. 第8回調査部会の概要

日時：平成25年1月18日（金）15:00～16:30

場所：中央合同庁舎 第5号館3階 特別会議室

出席者：山岡座長、橋本副座長、井出、長尾、堀、松澤の各調査部会委員 他

### 2. 議事概要

「南海トラフ沿いの大規模地震の予測可能性」の議論に当たり、事務局から説明を聴取し、委員間で議論を行った。今回の議事の概要は次のとおり。

#### ・委員間の議論

- 東北地方太平洋沖地震のときには、地震活動の変化が観測されたという事実があり、南海トラフでもし地震活動が多ければ、何らかの変化があらわれる可能性がある。しかし、現状の観測点では余り地震活動を捉えることはできていない。
- DONETで観測している場所に関しては、地震の検知数はDONETを使わない場合に比べて二桁は多くなっており、現状の観測体制でも地震活動が捉えられていないということはない。しかし、観測網が不十分なことは確かで、DONETがないところはもちろん捉えられない。
- 観測体制が整ったとしても、本震の発生前に地震活動の静穏化などの変化が生じるかどうかは分からない。観測体制を整えば、地震活動の静穏化などの変化が捉えられるという誤解を与えないようにしなければならない。
- 現状は、統計的に処理するだけの基盤的なデータがない。DONETが整備され10年、20年運用されれば、そういった基盤的なデータが出来てくる可能性はあるというのが共通認識でないか。
- どれだけ地震観測網を整備しても、東北地方と比べて南海トラフでは相対的に地震活動が低いのは事実であり、そのテクトニクスの違いを示す必要がある。
- 従来は便宜上、東海地震、東南海地震、南海地震と3つに分け、それらの組み合わせで南海トラフの大規模地震を表現していた。本調査部会ではそういう立場をとらず、地震には多様性があるという立場である。
- 東海、東南海、南海地震という地震の起こる範囲が区別できるような説明があるが、地震には多様性があり、そのような範囲ははっきりしたものではない。それ以上に多様性があるということを強調するべきでないか。

- 過去の地震に関する情報は不十分であり、その情報に基づき行った地震発生サイクルのシミュレーションによる予測は必然的にばらつきを持ったものになる。
- 地震の多様性を考える際に、津波地震について説明する必要はないか。

<本件問い合わせ先>

内閣府政策統括官（防災担当）付

調査・企画担当参事官 藤山 秀章

同企画官 中込 淳

同参事官補佐 平 祐太郎

TEL : 03-3501-5693（直通） FAX : 03-3501-5199